東京大学学際情報学府
社会情報学基礎V
社会科学のためのデータセッション実習02

2019年4月15日 18:45-20:30

学際情報学府本館７階演習室

酒井泰斗

1. セッションの進め方

A)　（30分）：報告者から、研究の目的やフィールドに関する紹介、資料の解説などをひととおりうかがう。

B)　（30分）：参加者全員でデータをざっと見て、分からない点、気になる点などを報告者に質問する。

C)　（30分）：報告者の解説によってフィールドの様子がわかってくるのにともなって、ディスカッションが 資料の中に見て取れる事柄そのもの の検討へと徐々に移っていく。

D)　（10分）：報告者によるまとめ

Aについて
資料提供者は、まずは「最低限これだけは知っておかないと このデータは読めない」という前提知識のうち・30分で提示できる範囲のものを準備・提示してください。

B について
最初は、席順に一人ずつ全員が「資料を見ていえること・思ったこと・想像したこと・疑問点」などを述べます。
その後、クリアすべき疑問点を資料提供者に確認します。

C について
まずは「要するにこの資料において人々は何をしているのか」を明らかにすることを目指します。
時間に余裕があれば、さらに先のステップへ。

D. について
講義終了10分前になったら、資料提供者の方は「今日わかったこと」「今後考えるべきこと」についてまとめを行ってください。

※スローガン：まず直観、次に理由

「カラリとした」乾いて明るい語りを基調とするかに見える『福翁自伝』には、意外と多くの屈託が含まれている。そうした屈託は、例えば、加藤の登場について語る福澤に現れる。

或日加藤弘之と今一人、誰であつたか名を覚えませぬが二人が裃を着て出て来て外国方の役所に休息して居るから　私が其処へ行て「イヤ加藤君　今日はお裃で何事に出て来たのか」と云ふと「何事だツて　お逢ひを願ふ」と云ふのは　此の時に慶喜さんが帰って来て城中に居るでせう　ソコで色々な策士論客忠臣義士が躍気となつて　上方の賊軍が出発したから何でも是れは富士川で防がなければならぬとか　イヤ嚮うでない箱根の険阻に拠て二子山の処で賊を塗殺しにするが宜い。東照神君（徳川家康）三百年の洪業は一朝にして棄つ可らず　吾々臣子の分として義を知るの王臣となつて生けるは恩を知るの忠臣となつて死するに若かずなんて　種々様々の奇策妙案を献じ悲憤慷慨の気焔を吐く者が多いから　云はずと知れた加藤等も其連中で慶喜さんにお逢ひを願ふ者に違ひない[注]

B. 最初の一歩：気づいたこと・わかったこと・疑問

■見ればわかること、読んで気づいたこと

a. 語り手は福沢諭吉。加藤についてのエピソードを回顧している。

b. 句読点がない。

c. 「徳川慶喜」、「上方の賊軍が」、「富士川・箱根で防がねば」…

- ➢ 戊辰戦争の渦中。鳥羽伏見の戦いの直後だろう。

d. 福沢は・加藤を・「気焔を吐く」者たちの一人として・描いている

■疑問

a. 直接話法「イヤ加藤君～」以降がどこで区切れるかわからない。

- ［何度か読んでみた→］　「～お逢いを願ふ」の後ろで切れるのかな？

b. 新たな疑問：では、その後ろの「と云うのは」以降を、福沢は（直接には）誰に向けて語っているのか。

- ［何度か読んでみた→］　自伝を書き留めている筆記者かな？

※河野有理「政体 加藤弘之と福澤諭吉」（河野有理編『近代日本政治思想史』, ナカニシヤ出版, 2014）からのキャプチャ。

2.マイルストーン（努力目標）：一気に難しいことを目指さない

step 1	**【出発点】** 資料を見て思いついたことすべてをとにかく言ってみる。	何を述べてもよい（ときに資料から離れてしまってもよい）が、発言の最後には資料に戻ってきて、その話が資料の**どこ**に**どう**関係するのかを述べること。 ● 議論の中で繰り返し資料に目を戻すことを習慣に。 ● 冒頭に「資料の**この箇所**についてですが」と決まり文句を付けて話し出す習慣を。 ➢ 「この箇所」と指示できるということは、「その周辺を**ユニット**として見ることができている」ということ。では、どの範囲にどんなユニットを見て取ったのだろうか。 他人の発言（発見）をよく聞いて、複数の発言・発見の関連性を見つけていく。
step 2	文書（資料）の（全体-章-段落-文など）各階層それぞれについて、「それは何をしているのか」「どんな行為なのか」と問うてみる： 反論？敷衍？再定式化？・・・	答え（行為の特定）の候補を挙げることができたら、次に、資料のどの場所を見て「そうしている」と言えると考えたのか省察してみよう。
step 3	**【中継地点】** 会の後半までのどこかで、文書（資料）の各階層について「要するになんなのか」をまとめることを目指そう。	「まとめ」ができたら、①「要するに〜〜である」となぜわかったのか、②その事態はどのように出現しえたのか、などについて改めて考えてみよう。 ● それは資料のどこを見たから言えたのだろうか。 ● 要約的に理解できたときに用いていた（常識的・学問的）知識や概念的装置はどのようなものだろうか。 ● 観察者がそのように要することができる事態を 参与者たちが 産出するために利用できた資源は 具体的には どのようなものだろうか。
step 4	**【見て言えること／推論して言えること】** 資料を見れば推論なしに言えることなのか、それとも推論したことなのかを区別してみる。	● 「想像によって追加した情報」と当該資料との関係はどのようなものだろうか。 ● なぜその情報を追加してよいと考えたのだろうか。
step 5	「自分自身の研究関心」を抑制してみる	● 資料に登場するひとたち（＝参与者たち）は、実際のところ、どんな課題に直面しているのかを考える。 ● 参与者たちがその場面で実際に使えただろうもの／使えないものを区別する。

※データセッションの主役はデータ。資料提供者の関心・課題は「参考意見」。成果や構想を検討する「研究会」とは違います。